

〈紹介〉

## 宮本袈裟雄・谷口貢編 著

### 『日本の民俗信仰』

長谷部 八 朗

本書は、「生活のなかに組み込まれた宗教」の諸相を、民俗学の立場から記述した諸論考から成っている。武蔵大学の故宮本袈裟雄教授と二松学舎大学の谷口貢教授の両氏を編著者に冠し、十三名の分担者を加えた総勢十五名の執筆陣による全十五章（うち特論二章）で構成された書である。内容は、「民俗信仰」の用語をめぐる両編著者の論に始まり、家の神、なりわい、通過儀礼、講と小祠、神社祭祀、仏教、宗教的職能者、シャーマニズム、俗信、現代社会、そして華僑・在日朝鮮人（この二者は特論）などの多様な項目を「民俗信仰」という全体的枠組みと関連づけて論じている。

編著者によれば、本書編輯の基本方針は大きく二つあるという。一つは、「この分野についてはじめて学ぶ人でも理解しやすく、興味をもてるような内容にするよう心がけた」（まえがき）点である。しかし、この種の学術入門書づくりは容易ではないといえよう。評論に流れず、かつまた単なる記実文に終わらせず、平明な記述を心がけつつ、しかも一定水準の学問的有意性を担保することが求められるからである。本書はこの点に配慮し、初学者向けの噛み砕いた

内容に、学術用語についての新たな問題提起を内包させている。ここに二つめのねらいがある。

では、その問題提起とは何か。すなわちそれが、「民俗信仰」という枠組みの導入である。そもそも、地域社会を中心に「生活のなかに組み込まれた宗教」を捉える枠組みとしては、「民間信仰」という用語が使われてきた。しかし、近代化、都市化の波が押し寄せ、伝統的な信仰や習俗は大きく衰微した。その一方で、仏教、神道、修験道、新宗教などに関する隣接諸科学の研究を通して、それら諸宗教と民間信仰との間に展開してきた密接かつ多様な関係が解明されるようになる。そうすると、成立宗教と対置させ、しかも地域社会を主要な拠点に据えた従来の民間信仰論では、こうした複雑多様な関係性を把握しえないとの指摘が出てくる。そこで一九八〇年前後から、民間信仰に代わり、「民俗宗教」の語が用いられ始めた。民俗学界において、その用法を主導的に進めたのは、桜井徳太郎であった。ところが、以後の推移をみると、この民俗宗教というタームも定着したとは言い難い。学際的に使用されるに及んだものの、この語に対する共通の理解がなされていないとは思えず、さらに、個々の学問が独自の解釈を明示しているわけでもない。そうした中で、改めて「生活のなかに組み込まれた宗教」を対象にするという原点に戻り、民俗学的信仰研究の立場を主体的に再構築するための用語として「民俗信仰」を位置づけようという、きわめて本質的な問題提起を本書は試みている。

以上に鑑みて本書を、初学者、そして民俗学はもとより関連諸科学の研究者等々に広く一読をお勧めしたい。なお、編著者の一人で